

〈天守り〉  
グロナーシュ

手の中で回していた竜の骨筆が落ちた。拾っては回し、拾っては回す。アート

ウナは、『実言葉辞典』を睨みつけた。

竜の骨筆は、頑丈であるかわりに、書き心地がよくない。それも不機嫌の一つだが、実言葉の暗記も、やる気が出なかった。ノウアから課題として出されたものの、まだ《ダマシュー(なぜ)》くらいしか覚えられていない。

おまけにむかつくのが、意味がやたら長い単語にあったときだった。それがいまだ。

「なんなの、この『オルクルアラ』って実言葉。『冬に薪の燃える様子を一人で見ていて、美しいと感じているが、それを、だれもないがために共有できず、憂鬱な気分の中におり、それでいて、原子的な魅力に静かに気づかされること』って意味だっけ!？」

アートウナは、書面をつついた。

そんな不平不満を言う彼女の後ろを、魔導師ノウアが通った。

「一般的な廃れ魔法文字だね。だれも使っていないさ、そんなもん」

「じゃあ、どうしてここに載ってるの。堂々と、幅だけとっちゃって。」

《ダマシユ―》、《ダマシユ―》

「知らなきゃ選べないだろうよ？ 引き出しは、多く持っておくものだよ」

ノウアは、忙しそうに発着所の扉を開けた。

「使えない引き出しなんか、意味ないと思うけど」アートウナはぶつぶつ言った。

「いまはそう思うだろう。だが、驚くことに、とんでもないところで、そいつが役に立つことがある。知識を持っていなくて損することは、山のようにあるが、持っていて損することはない」

アートウナは、だが、腐った毛皮のように、どろりと食事台の上に伏した。あたしは、これを見たくもないのよ。心の中で彼女は言った。くわえて、ノウアが「あたしが帰ったら、試験をするからね！」というので、さらに脱力した。「ええ〜！」

ノウアは出て行ってしまった。師は、いままでで最大の多忙の中にいるようだった。

当たり前でしょ。もう一人の自分が言う。〈見えない死〉のこと、聞いたでしょ。自然の村がやばくなっているって。そうになったら、飢えがはじまるんだって、ノウアは危惧してたわ。

でも、あたしのはいいわけ？ アートウナは自分に訊ねた。あたし、ほったらかされているんですけど。

魔導師になりたくないんでしょ？ 自分は言う。だったら、この状況を喜ぶべきじゃない？ なんにもしないでもいいんだもん。ぐじゃぐじゃした形の実文字アウレンザットゥなんて、ごみ箱にほいよ。それとも、あんた、魔法動物を殺して、みんなに崇められたいわけ？

殺戮者、殺戮者。おお、殺戮者様。

嫌だ嫌だ、だれも敵にしたくない。一人ぼっちにしないでほしい。

そのとき、発着場の扉がまたあいた。

入って来たのは、髪を乱したアリアだった。どこかの村から戻って来たのだ。

「ああ！ 勉強をしているのね！」喜ばしい限りと、アリアは顔を輝かせた。

いいや、勉強なんかしたくないのよ。そんな嬉しそうな顔しないで。喜んでいるのは、あんただけなんだから。アトウナはぶつくさ胸の中で言った。

だが、アリアは、真剣な表情になった。忙しそうに居間を出て行き、しばらく戻ってこなかった。

紫猫シャーナが、冷静な目でアトウナを観察する。彼女は机の上に飛び乗ったが、アトウナは咳払いして、「あんまりこっち見ないでくれる」と体を起こした。

「アトウナ、それ、すぐに終わる？」

アリアが、小袋を抱えて戻って来た。そのせわしない空気に、アトウナは

どこか心惹かれた。この暗記勉強から逃がしてくれるのかもという期待が、一瞬浮かんた。

「緊急なの？」

アートウナはそれだけ訊ねた。

「マノのところへ行くのよ。覚えている？ 夜に暴れ回る騒ぎを起こす子よ。魔法動物が憑りついているかもしれないっていう」

「ああ……」

「いまやっている課題のことなら、私が直接ノウアに言っておくわ。ねえ、一緒に来てくれない？」

そう言われては、困ってしまった。確かに約束はしたし、アウシザットゥ実文字暗記の方が明らかにつまらないのだが、かといって、魔導師として外に出るのは……。

シャーナがじつと見てくる。アートウナは負けた。

「分かった。行く」

彼女は立ち上がり、魔導師の貫頭衣を取りに行った。ここでまた一人になるよりは、まだましなのかなと思いつながら。

魔導師の木を出た時には、まだ力を誇っていた太陽も、使い魔に乗って薬の村

に着いた頃には、もう消えかけていた。

空は、群青と薄紫の入り混じった、妖しく深い色になり、それを背景に、暗い紫色の雲が、地平線近くで帯状に浮かんでいた。

「ちよつと、アートウナ！ エラドルスをもとに戻して」

葉の村の、はずれの空き地。空模様を眺めていたアートウナは、アリアの声に振り返った。

家程もある青い竜が、アリアの前で鼻を鳴らしていた。青竜は、屋根のような翼をゆすり、巨大な頭を煩わしそうに振った。

「……はいはい。エラドルス。もうもとに戻っていいよ。でかいのはおしまい」  
両手を叩きながら、アートウナは使い魔に言った。本当はこんなことしなくても戻ってくれるはずなのに。エラドルスは、主人を見向きもしなかった。

「いつもこうなの？」アリアが訊ねる。

「違う。いまは気分じゃないだけ」

アートウナは、恥ずかしくなって、彼女と彼女の使い魔を睨んだ。二人は、大きくなったまま戻らぬエラドルスを、じっと見上げている。

「ねえ、ちよつとだけ、向こうに行ってくれない？ 集中できないから」

「え？ ……ああ、はいはい」

アリアは肩をすくめ、シャーナを抱きかかえると、去っていった。

アートウナは、ため息をついて、エラドルスを見上げた。

「いい？ たしかに、あんたがでかくなって、空を飛ぶのは楽しいよね。けど、遊びはもうここまでなの」

「グアイ！」

竜の反抗の雄叫びは、遠くの山々を崩さんばかりだった。アートウナは耳を抑えた。アリアが飛んでくる前に、急いでなだめる。

「ねえ、帰ったら、また飛ぼう？ 大丈夫、すぐに帰れるって。マノを診るのはアリアだし、あたしは……なんかそのへんにいればいいんだから。平気よ、すぐに終わるって」

アートウナは、岩のように硬い竜の肩を撫でた。エラドルスは、憤怒を抑えるように、何度も鼻を鳴らした。火と獣の匂いが、煙と共に広がる。

「アートウナ？」アリアが呼んでいる。

「さ、ほら」

エラドルスは、しかたなく力を抜いた。とたん、鱗はみるみる縮まり、首もアートウナの腕ほどになり、あっという間に、膝に満たない小竜になった。彼は、軋んだ声で、情けなく鳴いた。

「よしよし。今日一日の辛抱よ」

彼らは、急いでアリアを追いかけた。

薬の村は、本当につまらない。真っ白な壁、無機質な四角い建物、どこもかしこも同じに見えて、いつまでも迷路の中にいるようだ。

アートウナは、ここで療養しているというマノに同情した。かわいそうに、面白いものがなんにもないじゃない。これじゃあ、暴れたくもなるわよね。

療養所への坂を歩いたが、薬の人たちは、すぐさま魔導師たちに道を開け、挨拶をした。尊敬、畏怖、それぞれ目に浮かぶものは違う。でも同じなのは、みんな魔導師の顔をみることだった。

「完全に夜になってから来ればよかったよ」アートウナは、小声でアリアに言った。

「あら。なぜ？」

「これじゃあ、顔も搔けない！」

アリアは、けらけら笑った。

「別に顔ぐらい搔いても問題ないわよ。でも、夜は危険だわ。マノは夜に暴れ回るんだから。ずだぼろになるのだけはごめんよ」

アリアは言った。「診察は私がやるけれど、あなたは補佐として、しっかりやってね」

「補佐って、なにすればいいの？ 応援してればいい？」

「応援！ はは、あなた、面白いこと言うわね」

「なによ。馬鹿にしてるでしょ」

「あなたこそ、この件を馬鹿にしてるでしょ」

笑顔だったアリアは、すっと真面目な顔になった。

「アトウナ、これはただの魔法の修行じゃないのよ。一人の命がかかっている。

呑気に構えていれば、魔法動物に襲われるかもしれないわ。魔法は使わなくていいって言ったけど、そのときになったら、自分の身は自分で守るのよ？」

毅然とした態度に気圧され、アトウナは、「わかった」というしかなかった。それなら、今回の魔法動物が凶暴なやつではないよう、祈るだけだ。どうか魔法を使わずに済みますように。すぐに診察が終わりますように。ゆっくりマノが寝られますように。どうってことなかったわねで済みますように。早く家に帰ることができますように……。好奇と畏敬の目に耐えながら、アトウナは必死に祈った。

坂の上の療養所につくと、アリアは慣れた様子で、シャーナに何事か呟いた。ぱっと彼女が手を開いた瞬間、シャーナは風を伴って主人の指に巻き付いた。

シャーナは、赤紫の宝玉をもつ美しい指輪になっていた。

「なんで!?! どういうこと!」

叫ぶアトウナに、アリアは狼狽した。

「患者様がいるところで、不必要に使い魔を歩き回らせないためよ。……ノウアから、教わっているものだ……」

結局、アトウナの使い魔エラドルスは、馬小屋に預けられた。アトウナは、恥で耳が熱くなった。

「知らなかったのよ。大丈夫、簡単よ。すぐに覚えられるから」

そういうことじゃないのだ。アトウナは、心の中で地団太を踏んだ。流れるように使い魔を指輪に変えたアリアを羨ましく思った自分に、困惑していたのだ。

あたしはなにがしたいの？ 自分に問う。魔法を使いたくないの？ 使いたいの？ 尊敬されたい？ 認められたい？ あたしは、どんなアベドになりたいのよ。

「ようこそおいでくださいました、アリア様、……アトウナ様」

背をぴんと伸ばした、銀髪を美しくまとめた婦人が、療養所から出てきた。彼女は、両腕を広げて、膝を落とす、魔導師に対する礼をした。だがその目は、アトウナを、上から下まで、さっと眺めた。

力量を図るようなその視線に、アトウナは縮こまった。

「パナフウラさんですね？ 手紙をくださった。……マノはどこに？」

「ええ、アリア様。マノは二階にいます。案内いたしますよ。それにしても、よく私がパナフウラだとおわかりになりましたね。お会いになるのははじめてですのに」

奥へ案内しながら、パナフウラは言った。

「すぐにわかりましたよ。文面から伝わるものと、同じものを感じましたから。とても几帳面で、丁寧で、芯がおりな方なんだろうと。本当にその通りでしたね」

アリアは朗らかに笑った。その笑みに、心を許さぬ者はいない。

「あら、そうでしたか？ 魔導師様にそうおっしゃっていただけるなんて、これほど名誉なことはいりませんね。やはり文字は書き手を表すのでしょうかねえ」

パナフウラは上機嫌になって笑った。アリアも楽しそうだった。アリアは、お世辞でなく、本心からそう思っただけで自然に言えるアベドだ。それができないアトウナにとっては、恐ろしい能力だった。

二人の後ろを影のようについていきながら、アトウナは階段を上がった。廊下で薬の人たちと談笑していた患者たちは、突然現れた魔導師に目を丸くした。彼らは、すぐさま畏敬を含んだ動作で両腕を広げ、礼を示した。腕をつつていようが、松葉つえをついていようが、お構いなしだった。ときにそれは、痛み

を持って行われた。

「ここです」

案内された突き当りの扉の前で、パナフウラは立ち止まった。

「魔導師様がお見えになりましたよ」

彼女がそう声をかけると、中から返事が返って来た。

部屋に入ったアートウナは、口をぽっかり開けた。広い。自分の部屋よりも、何倍も広がった。それに、天井も高かった。

だが、そこに子どもの足跡を見つけ、アートウナは鳥肌が立った。

正面には、大きな寝台が置かれていて、小さな少女が眠っていた。寝台と比べると、まるで豆粒のようだ。朝日のように煌々と広がる浅黄色の髪や、凜々しい眉毛に、アートウナは、我の強そうな子だなと、勝手に推測した。

寝台の横には窓があり、白く殺風景な部屋に唯一の変化をもたらしていた。墨色になった木々と、まだ明るさの残る夕暮れの空が見える。

それを背景に、一人の痩せ細った女が立っていた。薬の人特有の、丈の長い羽織を着ているが、それがまるで、かかしに布を引っかけたかのように見えた。

「シャーレイと申します」

シャーレイは、膝を折って礼を示した。その動作一つ一つが、疲れ切っているように、アートウナは思えた。

「シャーレイさん、マノの最近の様子を教えてくださいいただけますか？」アリアアが問うた。

「昼間はなんともないのですが、夜になると、急に暴れはじめます」

シャーレイがそう話す間、パナフウラが燭台に火を灯していき、窓に布を引いた。二人の薬の人に、きつい色が浮かんでいた。もうじき、問題の夜がやって来るからだろう。

「ご覧の通り、アベドとは思えない動きをします。信じられないと思います  
が、天井に張り付いたりもして」

アートウナは天井をちらと見た。やはり、あの足跡はマノがつけたのだ。

アートウナは、全身がびりびりした。なんなのだろう。大声で叫ぶ者に近づいたような、緊迫した空気が、この部屋にある。

「昼間は、元気なのですか？」とアリアア。

このときシャーレイは、首がもげそうなほど頷いた。

「他の患者様の食事を食べてしまうほどなんです。しかも、ずっと喋りっぱなしで、前は、この子の創作話に延々と付き合わされました。でも……」

「それは、ここへきた当初の話です」

言ったのは、パナフウラだった。彼女は、寝台へ歩み寄った。

「最近では、疲れたように寝ています。夜じゅう暴れ回るので、日中の体力がな

くなっているのです。食欲はありますが、いつも寝不足なのです」

アリエアは、マノに屈みこんだ。

「かわいそうに。辛いでしょ」

「やはり、魔法動物ですか」と細身のシャーレイ。

「ええ、おそらく。なにか、強いものが……」

言いながらアリエアは、あなたもわかるわねと言いたげな目で、アトウナを見た。

アトウナは、マノに近づきたくなかった。近づいたらぶつ倒れそうな気がしたのだ。アリエアが言いたいのは、この見えない大波のことだろうか。でも、シャーレイとパナフウラは、これに気がつかないの？

「マノは、どこまで、我々を信用しているでしょう？」アリエアは、険しさを眉間に表し、菓の人たちを見た。

細身のシャーレイが、そこで感づいた。

「ということは……〈飛び込み〉をするおつもりですか？」彼女は言った。

アトウナは、ぎくりとした。

「そちらの方が、安全にマノの状態を知ることができます。が……」

アリエアは続けた。

「マノが、我々の〈飛び込み〉を快く思っていない場合、別の手段を試みます。

それが、〈呼び〉です。〈呼び〉は、魔法陣を通し、こちらの世界〈現<sup>げん</sup>〉に、魔法動物を呼び出す方法です」

「ええ。存じております。けれど、それだけ危険性が増すのでしよう」パナフウラが眉間にしわを寄せた。

「はい。こちらに魔法動物を呼べば、彼らは突然のことに混乱し、ときに、攻撃を仕掛けてきます。〈呼び〉はつまり、憑りついている魔法動物を引きずり出すことなのです」

アートウナは、大事になりそうな予感に、身が押しつぶされそうだった。アリアのいうやり方を、まだ自分は一度もやったことがないし、完全に理解もしていなかった。第一、使い魔を指輪に変えることもできない魔導師が、ここでなにができるっていうわけ？

でもアリアは、「今回は二人いますから、〈呼び〉を行おうと思うのですが、どうですか」などというので、もう逃げられなかった。

パナフウラは、安堵の表情を浮かべた。

「ええ。私たちも、マノの立場は極力守りたいので」

アリアの指示により、薬の人は部屋を出て行った。けれど、細身のシャーレイの方が、悲痛な声を上げた。

「マノは、〈呼び〉に耐えられるのですか？まだ子どもですよ！ 一人にしては

おけません。もしなにかあったら……」

「シャーレイ、魔導師様にお任せして。いまは、私たちの出る幕ではないわ。さあ」

「ああ！ マノ……、どうか……！」

それっきり、扉は音を立てて閉められた。

「……さあ、準備はいい？」

切り替えてアリアは言ったが、アトウナは首を振った。

「ぜんぜんよくない。だって、なにをするのかもわからないんだよ」

「魔法陣を作って、魔法動物を呼ぶ。正体を突き止める。これだけよ」

アリアは、さつさと鞆から木炭を取り出し、床に文字を書きはじめた。複雑な曲線を持つ文字が、次々と現れ、手をつなぎ、点を打たれて、また次に進む。

アウンザレトク  
実文字だと、アトウナはすぐにわかった。彼女は、十三年間で得た知識を総動員して、なにが書いてあるか知ろうとした。

「向こう 住人 これ街灯 あなたは次 出る必要 ある これ見る 我に教える？ しかし 出ること できない 私は……。なにこれ？ 最後まで  
ういう意味？」

アトウナは首を傾けて、寝台を囲むアウンシェスマン実言葉を読んだ。

「檻。私は檻」アリアは顔を上げず答えた。

「ふーん。けど、ぜんぜん意味がわかんない」

「……実言葉アクシエヌカシ、だから。……もつと……訳は……補わなきゃ、だめよ」

アリエアは複雑な実文字アクシザットウを書くのに苦労していた。

アートウナは、端から椅子をもってきて座った。

「ねえ、あのシャーレイってアベド、めっちゃ怖がってたね。あたし的には、このマノの方が怖いと思うんだけど。ねえ、アリエアは、無魔力アベドのことどう思う?」

アリエアは答えない。黙々と呪文を書き続けている。同じ文句を、何回も。

「実文字アクシザットウ、書くのだるくない?」

「黙ってて、アートウナ。一つでも間違えたら、魔法陣が壊れて、魔法動物が

〈現げん〉へ出てくるわよ。それで死ぬことだってあるんだから」

「じゃあ、答えてよ。どうしてあたしたちは嫌われてるの?」

「……嫌われてなんかいないわ。ただ、違う力を持っているだけよ」

「違う力? それを持っているから怖がられるの? でも、あたしたちは、無魔力アベドたちを取って食うわけでもないし、呪いをかけるわけでもないわ。魔法動物を退治して、呪いを解いて、憑りつかれたアベドを救って、時には、狩りの村の魔法陣を直す。でも、怖がって感謝しているのが見え見えだよ! 本心で感謝したとしても、そういう決まりだからでしょ。礼儀を示さないと、心臓を食わ

れる、そう思われながら仕事をするの、嫌じゃないの？」

アリエアは、完成した魔法陣を、ため息をついて眺めた。木炭をしまい、手をはたく。

「私たちは力を持っている。それは、他のアベドにはないこと。どんなに望もうが、手にすることができないものなのよ。持っていない者たちにとっては、それは決して理解できないものなの。だから、恐れるのよ。どんなにいいことに使われていようと、その正体が完全に理解できなかったら、恐れを感じるのは当然だわ」

アリエアは、微かに暗い笑みを浮かべた。

「私たちは、魔導師よ、アトウナ。あなた、自分と他のアベドが、同じだと思っっているでしょ。……彼らとわたしたちは、姿形は同じだけれど、まったくの、別物なのよ。それを理解しなきゃ」

アトウナの胸に、悲しい炎が沸き上がった。

「嘘だ。そんなの、あたしは理解したくない」

「理解して。いまだけでも」

同じ紫のアリエアの目に、疲労の色を見たアトウナは、わずかに罪悪感を抱いた。

「来て。〈呼び〉を教えるわ」

アリエアは、改まって、傍に来るよう、くつと首を傾けた。

アートウナは、これ以上困らせてはいけないと、渋々椅子を降りた。

「〈呼び〉には、まず、宿主を囲った実文字アクシザットの魔法陣と、転がり豚リレンバリゲの骨粉が必要よ」

彼女は、小袋を手の中でゆらした。

「これで宿主を眠らせ、安全に魔法動物を呼び出すことができるの」

「なんで眠らせるの？」

「なぜだと思う？」

アートウナは、頭を働かせた。

「これを考えるには、〈黄身〉のことが重要よ」アリエアは言った。

〈黄身〉……。アートウナは、周囲を見渡した。

どの物体にもあると言われている〈黄身〉については、ノウアから再三教わっていた。自分たちの魔力は、〈黄身〉に直接働きかける実言葉アクシエスムンを使うことで、働くのだと。

「〈黄身〉は、魔法動物が好きなものなんでしょ」アートウナは確認した。

「まあ、そうね。というよりも、魔法動物が隠れやすい場所って言ったらいいかしら。私は、〈黄身〉のことを、一種の部屋ルームのようだと思っているわ」

アリエアは頷いた。

「〈黄身〉という名前は、卵の中、という意味から付けられたの。外側ではなく、内側を満たす、物体本来の情報が〈黄身〉よ。〈黄身〉には、ありとあらゆる感情、欲求、構成物質の情報が入っている、超個人的空間なの。〈黄身〉は、生き物の場合、普段は個体の深いところに存在している。けれど、眠っているときは違う。浮上してくる。そして〈黄身〉は、乗っ取られやすくなるの」

アリイアは、アトウナがノウアから教わったときと同じようなことを言った。

「無防備ってことじゃん。眠ってるときって」とアトウナ。

「眠っているときだけではないわ。気持ちが不安定なときや、体が弱っていると きやなんかもそうよ」

「もし、起きてるときに、〈呼び〉をやったら、どうなる？ 〈黄身〉は……」アトウナは、なんとなく思っただけで訊ねた。

「……『魔導師記録書』に、そういう事故のことが書いてあったわ。

睡眠魔法をかけて、〈呼び〉を行ったけれど、〈呼び〉の最中に、アベドの目が覚めてしまったって」

「……それで？」

「せっかくこっちに出かけた魔法動物は、急に〈黄身〉が奥へ沈んだことで死んでしまい、その衝撃に耐えられなかったアベドも、亡くなってしまったんだって」

「……うう、よくわかった」

アートウナは、身震いした。アリアが、「準備はいい？」と訊ねてくる。話を聞いて断然怖くなってしまうたが、やるしかなかった。

自分もマノも、無事でいられるよう、最善を尽くすしかない。

「なにがおこるかわからないわ。もちろん、あなたのことは守るけれど、最後は自分のことも信じなさいね」

アリアは言った。アートウナは、歯を食いしばった。

転がり豚の骨粉を、アリアはマノの上にふりかけた。それから、魔法陣をつ

ま先で踏みながら、こう言った。

《シエンウエ・リ・ローウ

トルウンマオウ・シエレリ・ダブ

オウーマ・ニン・シル・ハ・マノ

フルーザヨン・トウンタ・レサ・クイト

スーウエン・ハ・シャンウエ》

言い終わった途端、突風が巻き起こった。

アートウナは、呻いた。ものすごい風圧に、彼女は倒れそうになった。

「ア、アリア！ アリア！」

叫ぼうが、声は後方へ飛んで行った。目が開けられない。とてつもない冷気が

押し寄せてくる。肺が潰れそうになり、アートウナは声が出なくなった。

すると、水の中に入ったかのように、風はやみ、空気が重くなった。自分の呼吸音がこだまする。

薄く目をあけると、寝台とマノに、濃い霧がかかっていた。霜が、自分のまっげに張り付いている。湿った匂いが、煌めく靄とともに流れていた。

「……アリア？」

呼んだとたん、目の前の存在に気づいた。

マノの上に、山のように聳える、真っ青なヤモリがいた。ぐりりとした目玉をこちらに向け、分厚い六つの足を腹の下にしまい込んでいる。ぼつぼつとした鱗が、手に取るようにはっきりと見えた。

「〈天守り〉……!」

アリアの声が、ねっとり耳に届いた。隣を見ると、アリアが驚きで顔を強張らせていた。

〈天守り〉は、その肉厚な体を、魔法陣の中でぎゅうぎゅうに縮こめて、鎮座していた。首の脇にある、切り込まれたような溝からは、呼吸に伴って、内部のよくわからない臓器が見え隠れしている。

アートウナは、いまずぐ引き返したくなった。なんで〈呼び〉に賛成したんだろう。なんでここに来ると言ったんだろう。家で実言葉の暗記をしていたほうが、

まだ安全だった。

〈天守り〉は、その平たい頭を、ぐっと魔導師に近づけた。二人の魔導師はぐらついた。

突き出された巨大な目玉は、いく千もの月日の空を眺めてきたかのような、深みのある青をしていた。

アートウナは、ふと、天気の良い日の青空を思い浮かべた。真っ青な、雲一つない、真夏の空を。

「〈天守り〉。私は、第155代魔導師長ノウアの弟子、アリアです。あなたを呼んだ者です」

アリアが寒さで震えながら言った。アートウナは、ぎよつとして彼女を見上げた。

「〈天守り〉って、エイネー語、わかるの!？」

「しーっ、黙ってて」

アリアは、今の状況を把握しようと必死だった。なぜエイネーの上空に住まう重鎮魔法動物〈天守り〉が、小さな少女の〈黄身〉に憑りついているのか？

それに、アリアは、一挙一動に気を配ることに集中していた。魔法動物の中でも強力な魔力を持つ〈天守り〉は、エイネーに恵みの雨や風を起こす、崇高な存在だ。怒りを買うような真似をしたら、災いをもたらしかねないと、彼女は警

戒した。

〈天守り〉<sup>ダグロナーシユ</sup>は、風の唸りのような声で、なにか言った。だが、若き魔導師たちは、うまく聞き取れなかった。

「やっぱり、エイネー語は、わからないんだよ」

アートウナが言い、アリアは、「しーっ」と首を振って、今度は実言葉<sup>アウシエスムン</sup>で話しかけた。

すると、風鳴のような声が、音階を持って響いた。

アリアは、反応があったとみて、実言葉<sup>アウシエスムン</sup>で続けた。

《〈天守り〉<sup>ダグロナーシユ</sup>、なぜ、天の住まいからここへ来たのですか？ 私たちはそれを知りたく、あなたをお呼びしたんです》

〈天守り〉<sup>ダグロナーシユ</sup>は、アリアの言葉をじっくりと聞いたが、今度はアートウナに目を向け、なにか言った。

その紺碧の瞳に見つめられたアートウナは、くらくらと眩暈がした。

だがそのとき、彼女の耳に、知っている単語が飛び込んできた。

「《<sup>な</sup>ダマシユー》、《<sup>な</sup>ダマシユー》」

「なぜって言ってる！」アートウナは叫んだ。

アリアも頷いた。アリアは、それ以外にも、別の単語を聞き取っていた。

〈〈空〉……、〈穴〉……、また〈なぜ〉だわ。なにを疑問に思っているの？〉

〈天守り〉<sup>グロナイシュ</sup>は、長々と喋っていたが、アートウナもアリアも、それ以上は理解できなかった。

二人の魔導師が困惑を浮かべていると、〈天守り〉<sup>グロナイシュ</sup>は、ぐつと身を引き、ルルル、と不気味な音を発した。溝が震えている。

アートウナは、ぞわりと鳥肌が立った。体全体に魔力の重圧がかかり、血管という血管が圧迫された。

(まって、これ、まずいんじゃないの?)

そう思った次の瞬間、腹に〈天守り〉<sup>グロナイシュ</sup>の分厚い手が食い込んでいた。

「いやああああっ！」

「アートウナ！」

息ができない……！ このまま死んじゃう！ 肉厚の〈天守り〉<sup>グロナイシュ</sup>の指が胴をしめる。手を使つてはさそうとするが、びくともしない。

足が宙を蹴る。

アートウナは、恐怖に陥った。「うあああああああああ！」

とたん、ぱつ！と光線が〈天守り〉<sup>グロナイシュ</sup>の手首を撃った。〈天守り〉<sup>グロナイシュ</sup>は驚いて、アートウナを地面に落とす。

アートウナは、顔を上げた。

アリアが、〈天守り〉<sup>グロナイシュ</sup>の前に立ちほだかっていた。

《〈天守り〉、私たちが未熟であることは認めます。ですが、あなたが私たちに傷つけるのは許さない。どうか穏便になって。私たちは、あなたの話を最後まで聞きますから》

〈天守り〉は、ぎよろつと青い目を剥いた。

アトウナは、はっとした。

〈天守り〉は、気づいたようだった。震える赤毛の魔導師と、実言葉アウシエスモンを流暢に話す背の高い魔導師。どちらがより自分を理解してくれそうかを。

「アリア、逃げてっ!!」

だが、遅かった。

アリアはすでに〈天守り〉の手の中にあり、〈天守り〉は後ろ脚で飛び上がった。

《ゴルーテ・アリマ（留めろ）!!》

アトウナは叫んだ。とたん、彼女の手から火花が散り、鋭い糸がアリアへ伸びた。

だが、前でどさっと倒れる音がし、アトウナははっとした。

アリアの体が、人形のように潰れていた。

「え……嘘、嘘、嘘っ！」

どうやら、〈天守り〉は、アリアの〈黄身〉シムラだけを持って行ってしまったよ

うだった。

頭頂を襲う暴風に、アリアは声が出なかったが、さらに足首を引っ張る力が加わって、呻いた。

アトウナが、つなぎ止めの呪文をかけたのだ。足に糸が絡みついている。無事に〈黄身〉をつなぎとめてはいるが、アリアは、〈黄身〉となっても感じる体の痛みを呪った。それから、こうなってしまった自分の失態も。

〈天守り〉は、なおも上昇しようとした。

アリアの足は、千切れかけた。

「痛い痛い！」

すると、〈天守り〉は力を緩めた。

《……ドゥーテアンハールナ……ミロ……ソラヲ……ナゼ……？》

〈天守り〉は言い、空を見上げた。

そこには、瑠璃色をした、高い空が広がっていた。はっきりと弧を描き、ちらちらと踊る光の粒が、靄のように集っている。

あれは、雲だ。

そのときアリアは、あることに気がつき、はっと眼下に目を向けた。

恐ろしいくらいに冴えわたる緑を放った大地が、はるか下に広がっていた。中央には、銀色に輝く雄々しい突起がある。周囲はおどろおどろしい真っ青な世界が渦巻き、どれもこくこくと命の鼓動を発していた。

アリアは、億千万の光の粒が、それらを構成していることに気づいた。そしてその粒が、微妙に位置を変えながら、それぞれ脈打ち、世界に複雑な流れをつくっているということを知った。

アリアは、目が回った。

あの光の粒、あれは、〈黄身〉だ。物体がもつ〈黄身〉。動物、虫、空気、水、大地、樹、そしてアベドたちがもつ〈黄身〉が、想像を絶する数として集まって、世界を作っていた。

（ここは、〈現〉じゃない……）

アリアは震えた。このむっとする生命のきらめきを感じられる世界こそ、魔法物の住む、〈内世界〉なのだ。

（ということは、〈天守り〉は魔法陣を突き破って、〈内世界〉まで私を連れてきたのね）

さすがは重鎮ともいえるが、いまは感心している場合ではなかった。

〈天守り〉は喚き、天頂の様子に苛立っていた。

空へ目を戻したアリアは、そこでまたあるものを見つけ、戦慄した。

透明な浮遊体が、空で遊んでいた。

楕円をえがくその浮遊体は、輪郭を虹色に光らせ、ふわふわと天頂を漂っている。そしてそいつには……〈黄身〉の輝きがなかった。

そいつらは、何匹もいた。さらに一匹は、目も鼻もないのに、〈天守り〉の方へ降りてきた。そのゆったりとした速度に、アリアは恐れを感じた。

〈天守り〉は、いくつか言葉を発した。怒気を感じるその強い口調に、アリアは、事態がひっ迫していることを悟った。

〈天守り〉は、さらに浮遊体の方へ飛び上がる。けれど、アトウナのつなぎとめの呪文が邪魔をし、アリアの足をさらに痛めた。

(……〈天守り〉は、なにかを見せたがっているのかも。それに従うか、それとも、さっさとここから逃げて、つなぎとめの呪文をたどって〈現〉へ帰るか……)

苦痛で声が出なくなりながら、アリアは考えた。もちろん、安全なのは後者だ。けれど彼女は、それではなにもわからないまま終わると気づいていた。

問題は、断ち切ったあと、肉体へ戻れる確証はないということだ……。

アリアは、目をつむり、覚悟を決めた。

《バーダン (切れ)》

とたん、つなぎ止めの糸は切れ、〈天守り〉は空高く舞い上がった。

魔法を続けていたアートウナは、後ろへすっころんだ。

「わあ！ ア、アリアア！」

叫ぼうが、見えるのは暗闇に沈む寝台と、ひたすらに眠るマノ、そして崩れているアリアアの体だった。

「アリアア、アリアア！」

ゆすつても叩いてもつねっても、彼女は起きなかった。

アートウナの体に震えが走った。

（あたしが未熟なせい？）

アートウナは、そう思いながら呼び続けた。あたしがもっと力をつけていたら、こんなことにはならなかったの？

「お願い、アリアア！ 戻って来て！」

風に殴られながら、天頂へついたアリアアは、そこで起こっていたことに憎悪した。

風鳴が聞こえる。悲しい風鳴が。それは、透明な浮遊体が集う空から、漏れ出ていた。

浮遊体は、空を、齧っていたのだ。

体をねじり、飲みこむ。齧っては、飲みこむ。他のものに場所をゆずり、また齧っては飲みこむ。齧られた空は、そうして、皸だらけになっていた。

「〈天守り〉、あなたは、住処を荒らされていたのね」

アリアがそう言ったとたん、誰かに見られているような気がして、振り返った。

激しい緑の島、陶酔させられる青の真中山<sup>エイレスイェルアトクツア</sup>。さつきとなにも変わっていない。けれどアリアは、強い視線を拭いきれなかった。

視界に蠅が入り込んだ。彼女は、とつさに頭を振ったが、とたん、ぎくつとした。

〈内世界〉<sup>うちせかい</sup>に、蠅がいるはずがなかった。

「〈天守り〉、よけて！」

だが、〈天守り〉<sup>グロナイシュ</sup>が動く前に、その肩を、太い矢が貫いた。〈天守り〉<sup>グロナイシュ</sup>は叫び声を上げ、みるみる落下した。

アリアは、内臓がひっくりかえるひりりとした痛みを感じた。死んでしまう。真つ逆さまになって、頭が圧迫される。

紺碧の血が、玉となって宙に浮く。浮遊体が見えた。やつらは、〈天守り〉<sup>グロナイシュ</sup>の傷口を狙って、体をすぼめた。

食べる気だ。

悍ましい浮遊体が〈天守り〉グロナイシュに触れる刹那、〈天守り〉グロナイシュはがま口を開け、怒りと共に冷気を吹きだした。

あたり一面真っ白になった。アリアの頬は凍てついた。

手も足も、どんどん〈天守り〉グロナイシュの手の中で霜を這っていく。自分たちは、さらに落ちてゆく。

迫るのは、青い壁だ。

死。

とたん、アリアは叫んだ。その実言葉は、凍った浮遊体を焼き、裂けるような電撃音とともに、〈天守り〉グロナイシュの手と腹を焦がした。

〈天守り〉グロナイシュは手を放し、浮遊体とともに、海で水柱を上げた。

《シャーエレ（浮かべ）》

間一髪逃れたアリアは、沈む〈天守り〉グロナイシュたちを、震撼して見つめた。

そして、矢が放たれた方角、アバルバン谷を睨みつけた。

アトウナは、マノの部屋の燭台をつけてまわった。

寒気がする。腕を何度もさする。アリアは、まだ目を覚まさない。

アートウナは、朝になつてもアリアが起きなかつたら、ノウアを呼ぼうと考  
えた。けれど、それまでの時間が、恐ろしいほど長かった。

だから、アリアが咳き込んで起き上がったとき、「うわああ！」と抱き着い  
た。

「うっ、アートウ……」

「生きてる！？ 死んでない！？ ああ、よかった！ っていうか、あんたさ  
あ！」

「うるさい。声が大き……」

「つなぎとめの呪文、切ったでしょう！？ どうしてそんなことしたのっ  
アリアは、沈んだ目で床を見た。長い髪が重く垂れる。

「……そうするしかなかったのよっ」

彼女は、とつとつと語った。〈内世界〉で起こったこと、すべてを。

「戦って……、落としたの？ 〈天守り〉を、透明のやつもろとも！？」アート

ウナは、目の前の魔導師をまじまじ見つめた。

「〈天守り〉は、〈内世界〉で吹雪をもたらししたのよ。その影響は、きっと〈現  
でも起こる。ひどくなる前に、止めなきゃと思ったのよっ。それに……」

そういえば、さつきから肌寒いと思っていたが、そのせいだったのか。アート  
ウナは、なんとなく、腕をさする手を止めた。

「けど、マノから〈天守り〉を追っ払うことが、あたしたちの目的だったんですよ。だとしたら、成功じゃん」

「でも、〈天守り〉は、ただの魔法動物じゃないわ。エイネーに永い間恵みをもたらし続けてきた。もし、天候の災いがエイネーに起きたら、私に責任があるわ」

アリアは、ふらふらと立ち上がった。マノの顔を覗き込む。

「……で？」アトウナは、言った。

「え？」

「あんだ、向こうに行つて、死ぬと思つたんでしょ。どうしてそんな危険なところに、一人で行つたのっ？」

「……なに、怒っているの？」

「当たり前でしょ！ こっちが必死で助けようとしたのに、断ち切るなんて！ 勝手にもほどがあるんじゃない!？」

アリアは、ぴくっと肩を震わせた。

「……だって、〈天守り〉がああ状況を見せようと、望んでいたからよ。二度とこんな機会ないと思つた……。〈内世界〉の出来事は、エイネーにも影響する。知っておくべきだと思つて、あの判断をしたのよ。わかるでしょうっ」

「あたし、ここで、あなたが死んだんじゃないかと思つてたんだよ!? アリアにとつては、〈内世界〉の方が大事なんだね！ あたしがここでどれくらい吐き

そうにしていたかなんて、関係ないんでしよう！」

「そんなこと思ってないっ。私は、あなたを信頼して、〈天守りグロナーレム〉のもとへ行ったのよ！」

「嘘だよ！ アリイアは、自分が認められたいから、結果が、功績が欲しいから、無理やりでも〈内世界うちせかい〉に行ったんだよ。いつもアリイアはそうやって……」

「もうやめて……」

「ノウアに認められようとしてるっ。認められたいがために、なんでもかんでも一人でやろうとする!!」

そっぽを向いていたアリイアは、稲妻のようにアトウナに詰め寄った。

「じゃあ、なにっ？ いつもあなたは、部屋で寝そべって、くだらない本を読んばかり。外へ出たと思ったら、しょうもない魔法実験の材料集めに時間を費やして……。そうやって、自分の能力の無駄遣いをしていることに、なぜ気がつかないの?!」

「ノウアは、あたしなんか必要ないと思ってる！ そうじゃなきゃ、いつも部屋においておくわけじゃないじゃない。あんたが！ あんたが一人でなんでもやるせいで、あたしの意味がなくなってるんだよ！」

アリイアは、愕然とした。そのとき、子どもの呻き声が聞こえた。

マノだ。

彼女は起きなかったが、アリアは、ため息をついた。

「……もうやめましょ、こんなこと。疲れるだけだわ。ここでやるべきことでもない」

「あたしは、あんたに謝ってもらわないと気が済まない」アトウナは唸った。

アリアは、反論しようと口を開いたが、息を吸って、努めて冷静に言った。

「……悪かったわ。つなぎ止めの魔法も、かけてくれてありがとう。けど、私は本気であなたを信頼していた。〈内世界〉<sup>うちせかい</sup>から戻ってこられなくなっても、あなたならどうにかしてくれると思っていた。……その考えは、甘かったようだけど」

「それ、どつからそう思えるの。あたし、エラドルスを指輪に変えることもできないんだよ？」

アリアは、鞆から紙束を取り出し、やるべきことに戻った。マノの様子を記録する。

「『魔導師記録書』を読まないあなたは知らないでしょうけど、竜が使い魔の魔導師は、力のある魔導師であることが多いのよ」

「なにそれ。そんなの信じてるの」

「アケラスの使い魔が竜だったことを考えれば、納得するでしょ」

彼女は、マノの額にそっと触れると、言った。

《マラハウフーン（よく眠り、癒せ）》

マノは一瞬、気が抜けたように鼻を鳴らした。呼吸が深くなる。

「少しでも眠っておかないとね」

アリアは手を離し、扉へ向かった。

「……これで終わり？」

アートウナは、慌ててついていった。

「マノに対してできることはね。〈グロナーシユ天守り〉は……もういなくなったから」

アリアは、思いつめた顔でマノを振り返った。

「……アバルバン谷の矢のことは、どうするの？」

アートウナは、小声で訊ねた。

アリアは、首を振った。

「私からノウアに話す。それまでは、あなたも、だれにも話してはだめよ。変にこわがらせてしまうから」

アートウナは、まあ、あたしは友達が一人もないから、口外する危険はないんだけどねと思った。

アリアは深刻な顔をしている。まるでこの世の終わりを、一人で見ているみたいに。

アートウナは、そんな彼女の腕を強引に引っ張った。

「……。平気だよ」

「え？」

「マノのことは、もう終わったでしょ。あんたは〈天守り<sup>グロナーシュ</sup>〉をやっつけた。だったら、アバルバン谷もすぐ解決するわ」

アリアは、暗い瞳で微笑した。

「そうだといいけど」

「できるって」

アートウナは言った。

アリアの隣に立てる日は、きっとないだろう。魔法の知識を身に着けるのは、やっぱりごめんだから。

でも、彼女を支える立場をやめることは、まだアートウナの頭にはなかった。

若き魔導師二人は、そろってマノの部屋を出た。



黒暗に沈む、狩りの村の路地裏で、二つの影が会話をしていた。

一つは大きく、もう一つは子どものように小さい。後者は、体に似合わない、ひしゃげた帽子をかぶっていた。

大きな影の方が、「見つかったのか？」と訊ねる。

帽子のアベドは、静かな雨のような声で答えた。

「師の人がいない見習い集団を、一つ見つけた。『二本槍』っていう宿にいる。ドナウトの見習いで間違いないよ。師の人がいない六人集団は、そいつらだけだから……。でも、面倒なのが、光シスルアの民の守りを受けた者が、わらわらいること……」

「ああー、〈野駆け〉か。見習いは、〈野駆け〉に守られているのか」

男は、眉間にしわを寄せた。「王家の犬は、すぐに餌にありつくからなあ」

「〈野駆け〉は、大勢いたぜ？ たぶん、『二本槍』は、〈野駆け〉の隠れ家なんだよ」

「それは面白いな！」

男は、たまらず笑った。相手を見下ろす。「その帽子、大事にしろよ、タアラ。」

〈野駆け〉を見つけてことができるのは、その帽子だけだからな」

「……わかってるよ」

タアラは、つばの下で、わずかにはにかんだ。

「計画変更だ。お前が爺さんを見張れ。約束場所の師の村でも渋スイドったら、子スイドを使っててゆするんだ」

「それでも応じなかったら？」とタアラ。

「……。『資料』だけを持ちされ。翻訳が終わっていなくてもだ。爺さんは、そのまま切り捨てろ」

「わかった」

「俺たちは、王家の犬を片づける。じゃ、うまくやれよ」

「そっちもな」

タアラは、さっさと闇に駆けて消えた。

そのとき男は、視界の隅になにか白いものが入り込み、天を見上げた。

雪だ。

男は目を細めて、季節にしては遅れすぎている雪の意味を、思案顔で見つめた。